

音楽教育実践学としての授業研究における 質的研究の方法論的側面の検討

—内的な思考・イメージ・感情の動きを分析するために—

The Methodological Aspects of Qualitative Research in Lesson Studies in
the Study of School Music Education Practice : Analyzing the Movement of
Internal Thinking, Feeling, and Images

横山真理*

Mari YOKOYAMA

キーワード：音楽教育実践学，授業研究，質的な研究方法のアプローチ

Keywords : the study of school music education practice, lesson studies,
the methodological aspects of qualitative research

要約

本研究の目的は、音楽教育実践学において授業実践者としての問題意識から出発し授業実践を分析しより良い授業実践の創造のための手がかりを得ようとする質的研究の方法論的側面に関してどのような課題があるのか明らかにすることである。研究の結果、(1) 研究デザインの枠組みの明示、(2) 分析方法と分析手続きの明示、(3) 分析資料の作成方法の検討、(4) 音楽教育実践学としての授業研究における研究の方法論的側面の検討、の4点に課題があることを明らかにした。

Abstract

The purpose of this study was to clarify the methodological aspects of qualitative research in the study of school music education practice, which starts with the problem of consciousness as a lesson practitioner and analyzes lesson practice to obtain clues for the creation of better lesson practice. To this end, it analyzed classroom practice to formulate suggestions for improvement. The following four issues were identified: (1) clarification of the research design framework, (2) clarification of the analytical methods and procedures, (3) consideration of the methods for preparing analytical data, and (4) consideration of the

* 東海学園大学教育学部教育学科

methodological aspects of research on teaching as a study of music education practice.

1 問題の所在

1-1 音楽教育実践学における授業研究の進展

教育実践学は、「教育の理論と実践の統合によって、実践に生き実践を改善する新しい学問の創出を意図して誕生」(西園 2017, p.10)した、より良い教育実践の創造に寄与する学術研究の一分野である。音楽教育実践学の場合、学術的な研究の対象は「学校の音楽教育の実践」(董 2017, p.12)ということになる。音楽教育実践学の研究内容は、第1層として実践論的研究、第2層としてカリキュラム論的研究、第3層として基礎理論的研究の3つの層に構造化して捉えられており、実践論的研究が中核に位置付けられている(桑原 2017, p.12)。音楽教育実践学としての授業研究¹⁾は、実践論的研究(第1層)及びカリキュラム論的研究(第2層)で成り立っている。実践論的研究では、授業実践のさまざまな課題(教授と学習過程や学習形態、教材研究、指導技術、学力と評価方法、教師教育など)が取り上げられる。カリキュラム論的研究では、音楽科のカリキュラムを構築するための課題(目的・目標、指導内容とその編成および教材、単元の構成と展開、指導方法と評価など)が取り上げられる。これらの授業研究を、第3層の基礎理論的研究が支えるという関係にある。なお、本研究では「授業」とは教えと学びのコミュニケーション過程であるという考え方のもとで、幼児教育も範疇に入れて「授業研究」を論じる。図1及び図2は、以上の内容を筆者が概念図として示したものである。

日本学校音楽教育実践学会(実践学会と略)を中心とした音楽教育実践学の研究コミュニティでは、これまで授業実践者(実践者と略)や授業研究者(授業実践を研究対象とする者)によって膨大な量の研究が蓄積されてきた²⁾。

図3は過去27年間に発刊の実践学会研究紀要³⁾(学会紀要と略)に発表要旨の掲載が確認された、実践学会全国大会自由研究の部における口頭発表の数である。コロナ禍の影響を受けて、2021年度は研究発表の場である全国大会自体が不開催となり、2022年度および2023年度はオンライン開催となった影響を受けて発表数が減少しているが、総計1277本もの発表が行われてきた事実は揺るぎない(図3)。図4は、学会紀要に掲載された過去23年間の原著論文数110本の内訳である。このグラフから、授業実践を直接の分析対象としないカリキュラム論的研究と比較すると、授業実践を直接の分析対象とした実践論的研究が圧倒的であることがわかる。実践論的研究の多くは実践者によって取り組まれ、授業実践の諸記録を解釈によって分析する質的な研究がなされてきた。

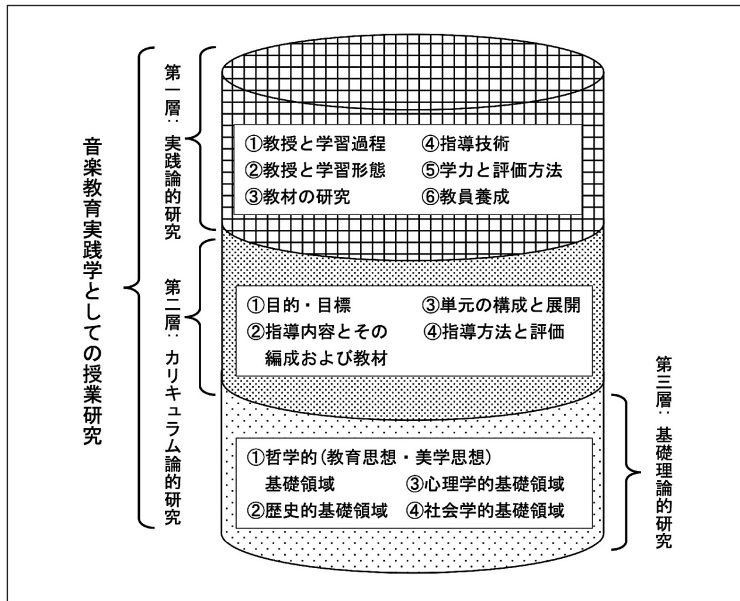


図1 音楽教育実践学における3層構造

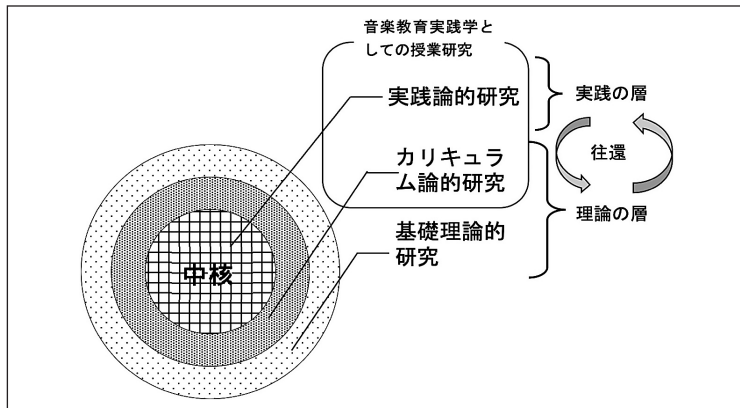


図2 音楽教育実践学の中核としての実践論的研究

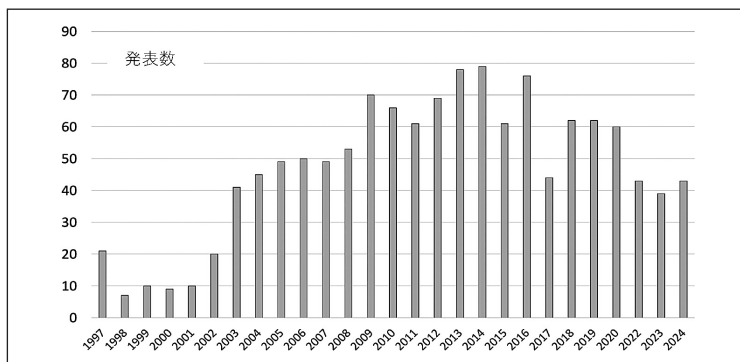


図3 学会全国大会自由研究の部における口頭発表数の推移

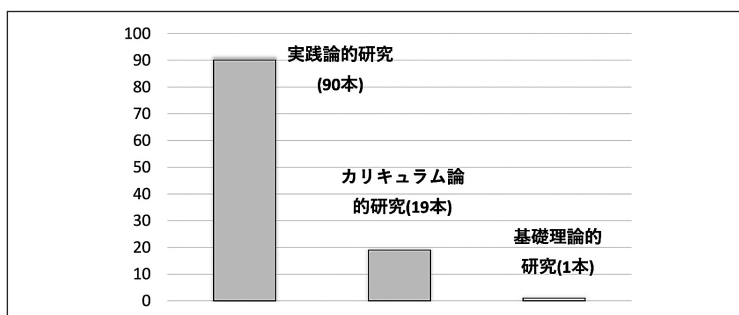


図4 学会紀要に掲載された原著論文数の内訳

1-2 実践論的研究の動向と課題

横山（2023）を参照すると、音楽教育実践学としての実践論的研究は、2つのタイプに分類することが可能である。1つのタイプは、J・デューイによる経験の再構成理論など特定の理論に依拠し、その詳細な理論的検討から視点を獲得し、授業実践の分析を通して視点を検証し、授業構成理論の構築を目指そうとする研究（タイプAの研究と表記）である。もう1つのタイプは、授業実践者としての問題意識から出発し授業実践を分析しより良い授業実践の創造のための手がかりを得ようとする研究（タイプBの研究と表記）である。どちらの研究においても授業実践の分析を中軸とした知見の導出が目指され、そのために授業実践の諸記録を解釈によって分析する質的研究の方法が多く採られてきた。

図5は過去23年間の学会紀要に掲載された原著論文の内訳である。82%を占める実践論的研究のうち、タイプAの研究は28%、タイプBの研究は54%を占めている。図6は、原著論文における実践論的研究の内訳の推移である。この図の中から2013年度から2023年度の間におけるタイプBの原著論文数の推移を抽出したのが図7であるが、この図を見る限り、タイプBの研究の減少が懸念される。ただし即断はできず、今後も研究動向を注視していく必要がある。

実践者自身が授業研究に取り組む上で、多くの実践者はタイプBの研究を行い授業実践の改善のための洞察を得てきた。そのようなタイプBの研究が伸び悩んでいる要因として考えられるのが、音楽教育実践学としての実践論的研究における質的研究の方法論的側面に関する問題である。実践者自身が自らの授業実践の諸記録を解釈によって分析する質的研究を進めていく上で、その基盤となる研究デザインについて具体的に検討することは欠かせない。「研究デザイン」すなわち研究をデザインすることは、研究の方法論的側面の具体的な要素を検討し要素間を相互に関連付けながら設計することである。研究の方法論的側面の具体的な要素としては、研究方法と研究アプローチ、分析方法、分析資料の作成手続き、分析結果の記述方法などが挙げられる。しかし、肝心の音楽教育実践学における質的研究の方法論的側面については、これまで実践学会の研究コミュニティ全体として位置付けが弱く十分検討されてこなかった感は否めない。一方で、

日々の授業実践に専心没頭している実践者が、研究職ではなく保育・幼児教育施設や学校教育機関で働いている場合、多種多様な業務を遂行しなければならない仕事柄、自らの実践論的研究の基盤となる研究の方法論的側面の検討にじっくりと取り組むゆとりはないのが現実であろう。こうした状況の中で、授業実践の諸記録を解釈によって分析する質的研究の基盤として欠かせない研究の方法論的側面の検討は個別の実践者に一任され、結果的に研究の方法論的側面の検討自体が不十分にしかなされないまま、授業実践の諸記録が分析されてきたのではないだろうか。このような問題を看過することは、音楽教育実践学の中核として位置付けられている実践論的研究に対する学術的な妥当性や信頼性を揺るがすものとなる。したがって、音楽教育実践学としての授業研究を専門とする研究者にとっては、授業実践の諸記録を解釈によって分析する質的研究の基盤となる研究方法論の具体的な検討に本腰を入れて取り組み知見を提供することが、喫緊の課題となっていると言える。

とは言え、この課題はそう簡単に解決できるものではないのも事実である。そう考える大きな理由は、質的な研究における研究対象と研究方法との関連にある。先述したように、これまでタイプBの研究においては、授業実践の諸記録を解釈によって分析する質的な研究が多くなされてきた。なぜなら、実践者は学習者の学びの事実を表面的な結果だけで捉えようとするのではなく、学習者の内的な思考過程を捉え意味付けようとする立場に立って、自らの実践を省察的に分析してきたからに他ならない。ところが、内的な思考過程は見えない心の世界であることから、そのような心の動きを授業実践の諸記録から「そこにある」と取り出す、すなわち解釈することは大変難しい。

そもそも質的な研究には根本的な問題が内包されていることを「ジレンマ」という言葉で示し検討しているのが、無藤（2005）である。無藤は、質的心理学研究にはどのように無知の対象に迫るのかという「無知のジレンマ」、どのように記述するのかという「記述のジレンマ」、実践的専門家の実践に研究者がどう向き合うのかという「協同性のジレンマ」があると論じている。無藤が提起した「無知のジレンマ」や「記述のジレンマ」の問題は、音楽教育実践学におけるタイプBの研究にも当てはまる。ここでは、無藤が提起した「無知のジレンマ」と「記述のジレンマ」を参照し、音楽教育実践学における「研究方法論のジレンマ」と言う言葉で説明する。音楽教育実践学における「質的研究の方法論的側面のジレンマ」とは、学校音楽実践の場における学習者の内的な精神活動、すなわち思考・イメージ・感情といった心の働きは実体がなく観察不可能であるにも関わらず、そのような観察不可能な精神活動をどのように授業実践の諸記録から取り出してどのように分析しどのように意味付けることができるのか、という意味でのジレンマである。そして、ここにはもうひとつの難問である、音や音楽という聴覚的に知覚され記憶の中にしかとどまることのない物理的事象をどのように記述するのか、というジレンマも重なっている。

本研究は、以上に述べたような音楽教育実践学が抱える「質的研究の方法論的側面のジレンマ」

に向き合い、学校音楽実践の場における学習者の内的な思考・イメージ・感情といった心の働きを質的に分析する上でどのような研究デザインを描くことができるのかについて探究する端緒となる研究である。本研究のような研究デザインに関する研究は、音楽教育実践学における基礎理論的研究に相当する。しかし、このような研究は音楽教育実践学の分野では管見の限り見当たらない。本研究の守備範囲は限定的なものであるが、音楽教育実践学としての実践論的研究におい

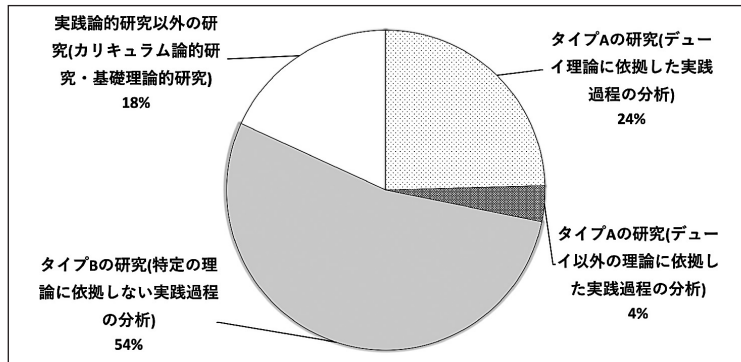


図5 原著論文における実践論的研究の内訳 (2001年-2023年)

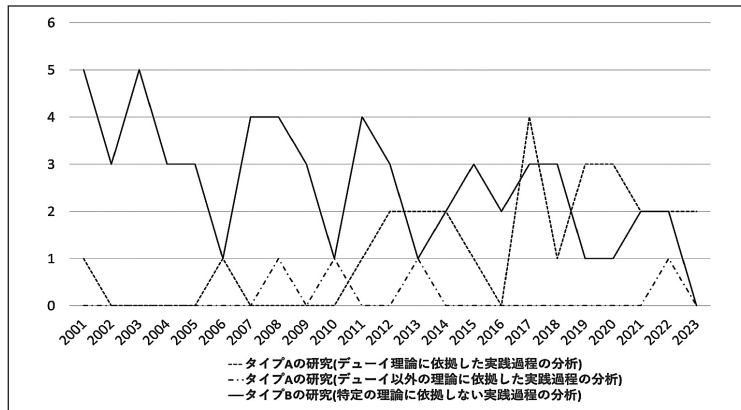


図6 原著論文における実践論的研究の内訳の推移 (2001年-2023年)

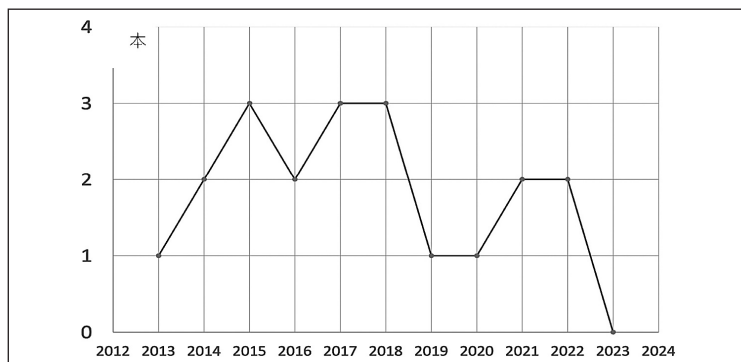


図7 タイプBの原著論文数の推移 (2013年-2023年)

て、授業実践の諸記録を解釈によって分析する質的研究に取り組むための研究デザインをどのように描くことができるのかについて、示唆を得ることが期待できる。

2 研究の目的と方法

本研究では、タイプBの研究、すなわち授業実践者としての問題意識から出発し授業実践を分析しより良い授業実践の創造のための手がかりを得ようとする研究に限定し、学校音楽実践の場におけるにおける学習者の内的な思考・イメージ・感情の動きを分析するためにどのような質的研究の方法論的側面の具体が明示されてきたのかについて、先行研究の傾向を分析する。それにより、音楽教育実践学としての授業研究のうちタイプBの研究の基盤となる質的研究の方法論的側面に関してどのような課題があるのか明らかにすることを目的とする。

研究の方法は、以下のとおりである。

- ① クレスウェル/操・森岡訳（2011）『研究デザイン』（『研究デザイン』と略）を参照し、問いを探究する研究者が描く研究デザインの枠組みを確認する。日本教育方法学会編（2014）『教育方法学研究ハンドブック』（『ハンドブック』と略）を参照し、教育方法学からみた研究の方法的側面の類型や強調点を確認する。
- ② タイプBの研究（2013年-2023年、全21本の原著論文）を対象に先行研究の傾向を量的に分析し、特徴と問題点を明らかにする。
- ③ 分析結果に基づき、音楽教育実践学としての授業研究のうちタイプBの研究の基盤となる質的研究の方法論的側面に関する課題を明らかにする。
- ④ 本研究の貢献と限界を示す。

3 研究デザインの枠組みと強調点

3-1 研究デザインの枠組み

最初に、『研究デザイン』を参照し、問いを探究する研究者が描く研究デザインの枠組みを確認する。『研究デザイン』によれば、研究デザイン、すなわち研究をデザインすることは「一般的で哲学的なアイデアの見極めから細かなデータ収集/分析の手順にまで及ぶ、研究のあらゆる側面に関わる」（p.3）要素と要素間の相互関連について設計することである。著者のクレスウェルは、研究計画をデザインするプロセスについて次の3つの問いを立てている。以下、引用する（pp.5-6）。

1. 研究者が行っているのはどんな知識の定義^{クレイム}なのか（理論的なパースペクティブも含めて)?
2. 手順を規定しているのはどんな探究の戦略なのか?
3. データ収集とデータ分析には、どんな方法が用いられるのか?

上記の問いに基づき、主要な4つの知識の定義（ポスト実証主義・構築主義・専門家によるアド

ボカシー/参加型・プラグマティズム)の位置付けと特徴が示されている。このような知識の定義を前提に、探究戦略の選択肢として、量的アプローチ、質的アプローチ、ミックス法によるアプローチの3種類があることや、各アプローチについての具体的な探究戦略の例が説明されている。質的アプローチによる探究戦略の例としては、エスノグラフィー、グラウンデッド・セオリー、事例研究、現象学的研究、ナラティブな研究が取り上げられている。さらに、それぞれの研究アプローチに基づく探究戦略におけるデータ収集と分析の方法や手順の特徴について説明がなされている。例えば、質的なアプローチに基づく探究戦略の1つである事例研究で言えば、「研究者は、プログラム、出来事、活動、プロセス、あるいは1人あるいは数名の個人を、徹底的に探究して行く。事例は時間と活動に関係しており、研究者は一定期間を通じて、多様なデータ収集の手順を用いて詳細な情報を収集する (Stake1995)」(p.16)と説明されている。以上に確認した『研究デザイン』によって示されている研究デザインの枠組みを、図8のように関連図として示す。

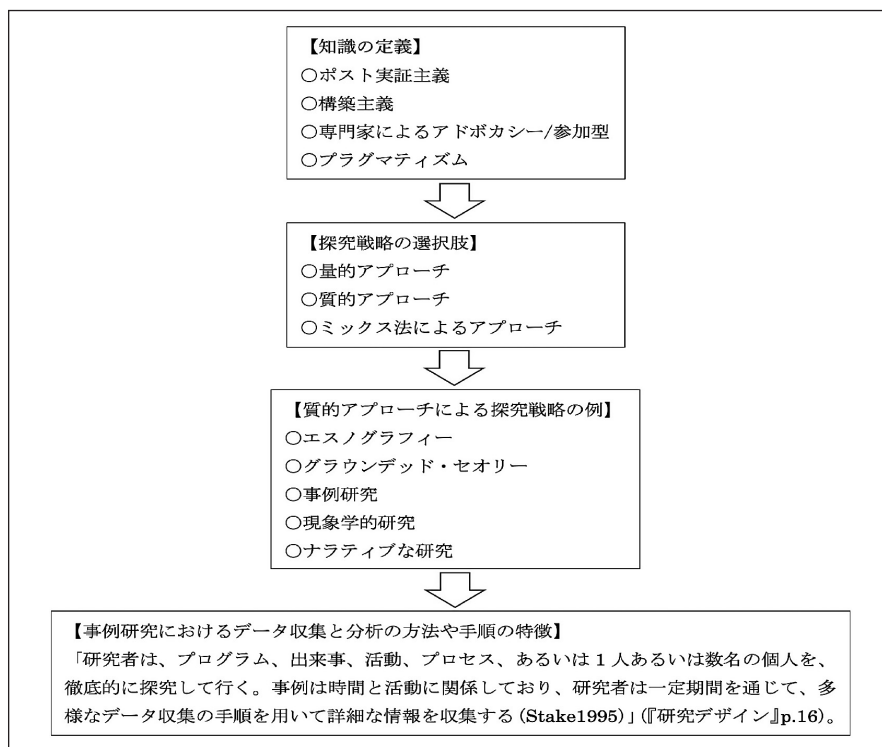


図8 研究デザインの枠組み (『研究デザイン』に基づき筆者が作成)

3-2 教育方法学からみた研究の方法的側面の類型と強調点

以上の『研究デザイン』によって示されている研究デザインの枠組みをふまえて、次に『ハンドブック』を参照し、教育方法学からみた研究の方法論的側面の類型や強調点を確認する。その際、『ハンドブック』で使用されているキーワードが『研究デザイン』で使用されているどのキー

ワードに相当するのか、必要に応じて整理し、キーワードの意味についての共通理解を図る。

『ハンドブック』によれば、研究方法は「量的研究」「質的研究」「混合研究」の3つに類型化される。ここで言う「研究方法」とは『研究デザイン』で言う「探究戦略の選択肢」にあたる。これらの類型に含まれる研究アプローチの例が、数々の用語で示されている（pp.52-55）（表1）。ここで言う「研究アプローチ」とは『研究デザイン』で言う「探究戦略の例」に相当する。『ハンドブック』は、以上のように研究方法の類型と研究アプローチを例示するとともに、「研究の方法論と計画（デザイン）の2つを明示し、各研究者の検討に対象にさらすこと」（池野 2014, p.52）が教育方法学の研究にとって必要であると強調している。池野の言う「研究方法論」とは『研究デザイン』で言う「知識の定義」に相当し、「計画（デザイン）」とは『研究デザイン』で言う「研究デザインの枠組み」に相当する。

一方、『ハンドブック』の中で池野は、「教育学研究において研究方法論が問題にされることはほとんどなく、それは「学問研究の方法論的反省が不十分」であることを意味すると指摘している（池野 2014, p.51）。

以上のことから、教育方法学の研究においては、研究デザインの具体的な要素を多様に組み合わせながら多様な研究が展開されてきた一方で、自らの研究が依って立つ研究デザインの具体を対象化して検討するという姿勢が弱かったと言えるだろう。また、そのような状況を鑑みれば、研究デザインの具体の開示という点から反省的に検討する必要があることが示唆される。このような傾向は、次章で検討するように音楽教育実践学としてのタイプBの研究にも当てはまる。すなわち、タイプBのほとんどの研究では自らがどのような研究の方法論的側面を採って研究を行ったのか明示されてこなかった。このことは、タイプBの研究を行ってきた実践者が自ら採ってきた研究の方法論的側面に無自覚であることによって、研究の方法論的側面の具体的な検討も十分になされてこなかったことの裏返しでもある。

表1 研究方法の類型と研究アプローチの例（『ハンドブック』に基づき筆者が作成）

研究方法の類型	研究アプローチの例
量的研究	データ分析/実験研究
質的研究	歴史的アプローチ/解釈学的アプローチ/現象学的アプローチ 批判的アプローチ/比較的アプローチ/開発的アプローチ/規範的アプローチ
混合研究	フィールドワーク/アクション・リサーチ/ライフヒストリー エスノグラフィー/ナラティブ・アプローチ

4 研究の方法の明示からみたタイプBの研究の検討

4-1 先行研究の分析手続き

本研究では、音楽教育実践学として取り組まれてきたタイプBの研究に絞って先行研究を検討する。特に、質的研究の方法論的側面に関してどの程度明示されてきたのか、質的な分析におけ

る著述の工夫がどのようになされてきたのかという視点から5つの分析視点を設定して対象論文における論述の仕方を検討し、各々の傾向を量的に把握する。分析視点と分析対象とした先行研究の抽出の手続きは、以下のとおりである。

—分析の視点—

- ①「研究の目的と方法」に相当する箇所、研究の前提を形づくる研究デザインの枠組みが明示されているか。
- ②「分析の方法」に相当する箇所、分析方法が明示されているか。
- ③「分析の方法」に相当する箇所、分析資料の作成手続きが明示されているか。
- ④作成された分析資料が開示されているか。
- ⑤分析資料の内容と解釈が区別された著述になっているか。

—分析対象とする先行研究の抽出の手続き—

- ①学会紀要『学校音楽教育研究』第5巻(2001)から第27巻(2023)に掲載された原著論文(110本)を、実践論的研究(90本)・カリキュラム論的研究(19本)・基礎理論的研究(1本)に分類した。
- ②実践論的研究を、タイプAの研究(31本)とタイプBの研究(59本)の研究に分類した。
- ③タイプBの研究の内、第17巻(2013)から第27巻(2023)までの21本の原著論文を抽出し、分析対象とした。

4-2 5つの視点からみた先行研究の量的傾向

以上の手続きによって抽出した21本の原著論文を対象に、5つの分析視点から対象論文におけ

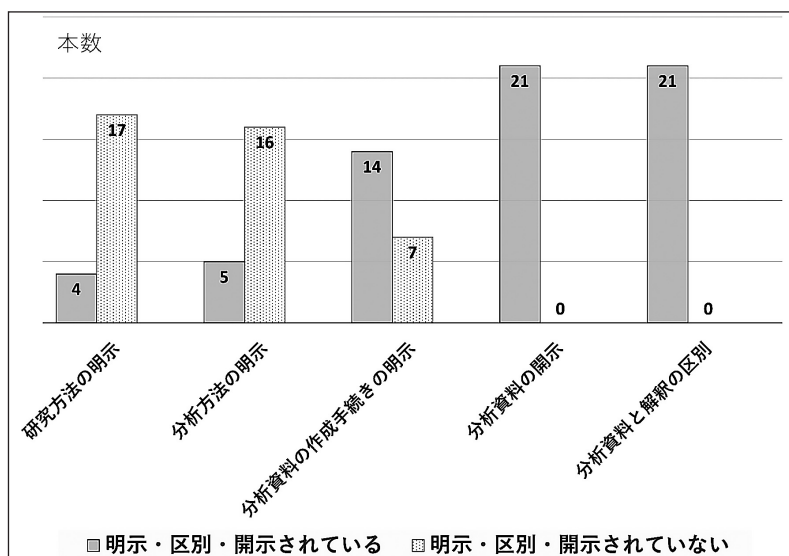


図9 5つの視点による21本の原著論文の分析結果

る論述の仕方を検討し、各々の傾向を量的に把握した(図9)。分析結果について、以下のとおり説明する。

①「研究の目的と方法」の箇所、研究方法が明示されているか

論文中の研究の目的と方法に関わる論述の部分は、研究の前提を形づくる研究デザインの枠組みを読者に提示する上で極めて重要である。その部分で研究デザインの枠組みに相当する論述が確認できたのはわずか4本であり、17本は明示されていなかった。しかも、研究デザインの枠組みに相当する論述が確認できた論文(横山2013, 2016, 2017, 2020)の執筆者は全て同じであった。論述が確認できないと判断した17本の論文の中には、「実践的方法」(5本の論文)あるいは「実証的方法」(1本の論文)をとると記されたものもあった。しかし、これらの論文は研究デザインの枠組みが明示されているとは言えないと判断した。なぜなら、「実践的方法」あるいは「実証的方法」がどのような研究デザインの枠組みを指すのか極めて曖昧なままそれらの用語が用いられており、依拠する定義や学問的根拠が不明だからである。

②「分析の方法」の箇所、分析方法が明示されているか

研究目的を達成するために必要な分析方法を明確に示すことは、分析結果の妥当性や検証可能性を担保する上で極めて重要な情報の開示である。しかし、この部分においても、分析方法が明示されていたのは5本であり、16本は明示されていなかった。しかも、分析方法が明示されていた論文(横山2013, 2016, 2017, 2020; 尾崎2014)の執筆者は2人にとどまっていた。

③「分析の方法」の箇所、分析手続きが明示されているか

研究成果を公開することを目的とした論文において、研究によって得られた知見がどのような分析の手続きを経ているのかについて分析結果とともに明示しておくことは重要なポイントである。特に、授業実践の諸記録を解釈によって分析する質的な研究においては、録画や録音によって授業実践を記録したり学習者の記述物や板書などの記録を収集したりする必要がある。そのような授業実践の諸記録を誰が収集するのか、収集した諸記録からどのような分析資料を作成するのか、分析資料をどのような方法によって分析するのかなど、具体的な分析の手続きについて明示しなければならない。この部分においては、分析資料の作成手続きが明示されていた論文が14本である一方で、明示されていない、もしくは明示が中途半端である論文も7本存在した。

④作成された分析資料が開示されているか

授業実践の諸記録を分析するにあたっては、録画や録音の記録を視聴しながらそれらを直接解釈し論述することはできない。録音や録画、記述物など授業実践の諸記録から逐語転記や複製などにより分析資料を作成し、分析資料を授業実践の客観的な記録として分析する手続きが欠かせない。そこで、論文中に分析対象となった分析資料を開示し解釈の根拠を示す必要があるが、この部分では20本の論文全てが開示されていた。

⑤分析資料の内容と解釈が区別された論述になっているか

分析資料を解釈し論述する際の留意点の1つに、分析資料の内容と解釈との区別が明示的にわかるようにすることがある。この部分でも、21本の論文の全てが区別されていた。

5 結論

本研究では、タイプBの研究（実践者としての問題意識から出発し授業実践を分析しより良い授業実践の創造のための手がかりを得ようとする研究）に限定し、授業の実践過程における学習者の内的な思考・イメージ・感情の動きを分析するためにどのような研究の方法論的側面が明示されてきたのか先行研究の傾向を分析した。それにより、音楽教育実践学としての授業研究のうちタイプBの研究の基盤となる質的研究の方法論的側面に関してどのような課題があるのか明らかにしようとした。そのために、5つの分析視点を設定して21本の原著論文における論述の仕方を検討し、各々の傾向を量的に把握して分析した。その結果をふまえ、音楽教育実践学としての授業研究のうちタイプBの研究の基盤となる質的研究の方法論的側面に関する課題を、以下のとおり明らかにする。

5-1 研究デザインの枠組みの明示

対象論文における論述の仕方から判断する限り、量的な分析手法と質的な分析手法を組み合わせたミックスアプローチによる研究も散見されたが、質的アプローチを採り授業実践の諸記録を解釈によって分析する質的な研究を行っているものがほとんどであった。しかし、ミックスアプローチにしる質的アプローチにしる、そのような研究アプローチを含む研究デザインの枠組みが明示されていた論文は20本中3本に留まり、しかも全て同じ執筆者であった。したがって、ほとんどの授業研究者にとって、自らの研究デザインの枠組みを構成する研究アプローチやその前提をなす知識の定義（認識論）は自明視され、暗黙の了解事項となっているが故に、読者に開示されていない。『研究デザイン』や『ハンドブック』によって確認したように、問いを探究する研究者が描く研究デザインの枠組みはいくつものカテゴリーに分類することが可能であり、だからこそ、教育方法学の研究においても、研究デザインの具体的な要素を多様に組み合わせながら多様な研究が展開されてきた。したがって、音楽教育実践学としての授業研究を行っている研究者も、研究デザインに関する学問的知見に依拠しつつ、授業研究者が自明視し暗黙の了解事項としている質的研究の方法論的側面を自覚的に捉えて検討の俎上へのせ、自らの研究デザインの枠組みとして明示化することが課題としてあげられる。

5-2 分析方法と分析手続きの明示

分析資料を開示しつつ資料と解釈を区別して論述する方法は、学会紀要を通して論述形式のノウハウが共有され定着してきたと言える。しかし、分析方法を明示している研究は極めて少なく、

分析手続きが明示されていない論文も散見された。したがって、分析方法と分析手続きを合わせて明示化することが課題としてあげられる。分析方法と分析手続きを合わせて明示化することにより、分析結果の妥当性を問うことができるようになり、結論として得られた洞察の了解可能性を高めることにつながる。これは、授業実践の解釈に依拠した質的研究を主とする音楽教育実践学の研究内容に対して、学術的見地からの批判的検討を行うことができる上で必要不可欠なことであり、ひいては音楽教育実践学における授業実践の分析研究によって得られた知見への信頼性を高めることにも結び付く。

5-3 分析資料の作成方法の検討

分析資料を開示しつつ資料と解釈を区別して論述する方法は、定着している。しかし、言語的な活動の記録である「逐語記録」(大谷 2000) に音や音楽や身体動作など音楽パフォーマンスにまつわる非言語情報をどのように記載するのか、十分に検討した上で分析資料が作成されているとは言い難い。大谷(2000)の定義によれば、そもそも逐語記録とは「授業者の発問・説明・指示、学習者の発言等、授業の言語的な内容を、文字化して詳細に記述したもの」である。この定義に従えば、音や音楽を採譜した楽譜、音を鳴らす行為や身体動作の説明を挿入した記録は厳密には「逐語記録」とは言えない。にもかかわらず、検討した論文の多くが音や音楽を採譜した楽譜、音を鳴らす行為や身体動作の説明を挿入した記録である分析資料を作成し、それを「逐語記録」あるいは「逐語録」という用語で表していた。音や音楽を認識対象とする授業においては、言語的な活動と演奏や身体動作などの非言語的な活動が組み合わさっている。したがって、言語・演奏・身体動作など、内的な思考・イメージ・感情を媒介する言語情報と非言語情報を統合的に把握した記録を分析資料とするのが相応しい。そして、そのようにして作成した分析資料は、「逐語記録」という用語ではなく、例えば「逐語記録を中心とした授業実践の諸記録」(横山 2023) という用語によって表すのが適当ではないだろうか。以上より、言語的な活動の記録である「逐語記録」に音や音楽や身体動作など音楽パフォーマンスにまつわる非言語情報をどのように記載するのか十分に検討し、「逐語記録を中心とした授業実践の諸記録」を作成して分析資料とするという課題があげられる。

5-4 音楽教育実践学としての授業研究における質的研究の方法論的側面の検討

音楽教育実践学における実践論的研究としての授業研究のうち、実践者としての問題意識から出発し授業実践を分析しより良い授業実践の創造のための手がかりを得ようとするタイプBの研究によって、実践者の省察をくぐり抜けた洞察が重ねられてきた。しかし、査読論文の本数から見ると、近年におけるタイプBの研究は量的に伸び悩んでいる。このような状況は、実践論的研究が音楽教育実践学としての研究の中核を担っている以上、望ましいことではない。一方でこ

の背景には、授業実践の諸記録を解釈によって分析する質的研究を行うタイプBの研究が、「質的研究の方法論的側面のジレンマ」と言う根本的な問題を抱えていることがある。それは、学習者の内的な精神活動、すなわち思考・イメージ・感情といった心の働きは実体がなく観察不可能であるにも関わらず、そのような観察不可能な精神活動をどのように取り出して分析し意味付けることができるのか、という研究対象と研究方法との関連によって生まれるジレンマである。それにもかかわらず、音楽教育実践学の研究コミュニティでは、授業実践の諸記録を解釈によって分析する質的研究を行う場合の質的研究の方法論的側面についてほとんど検討がなされてこなかった。したがって、音楽教育実践を研究対象として授業実践の諸記録を解釈によって分析する質的研究を行う場合の質的研究の方法論的側面について十分に検討することが課題としてあげられる。これは、音楽教育実践学における基礎理論的研究として取り組まれるべき課題であり、実践論的研究としての授業研究の基盤となる知見を提供する上で極めて重要である。

6 本研究の貢献と限界

本研究では、音楽教育実践学としての授業研究のうちタイプBの研究の基盤となる質的研究の方法的側面に関して以下の4点にわたる課題があることを明らかにした。

課題1：授業研究者が自明視し暗黙の了解事項としている質的研究の方法論的側面を自覚的に捉えて検討の俎上へのせ、自らの研究デザインの枠組みとして明示化すること（研究デザインの枠組みの明示）。

課題2：分析結果の妥当性を問うことができるようにするために、そして結論として得られた洞察の了解可能性を高めることができるようにするために、分析方法と分析手続きを合わせて明示化すること（分析方法と分析手続きの明示）。

課題3：「逐語記録を中心とした授業実践の諸記録」を作成して分析資料とするために、言語的な活動の記録である「逐語記録」に音や音楽や身体動作など音楽パフォーマンスにまつわる非言語情報をどのように記載するのか十分に検討すること（分析資料の作成方法の検討）。

課題4：音楽教育実践を研究対象として授業実践の諸記録を解釈によって分析する質的研究を行う場合の質的研究の方法論的側面について十分に検討すること（音楽教育実践学としての授業研究における質的研究の方法論的側面の検討）。この課題は上記1から3の課題を包括する。

高木（2011）は、「質的研究の結果の信憑性を高めるためには、研究プロセスの明確な記載やテキスト解釈プロセスの適切な開示などの努力が、さらに必要とされる」（p.99）と指摘している。しかし、これまで音楽教育実践学としての授業研究においては、質的研究の方法論的側面が十分に検討・明示されないままに、分析結果に基づいて導かれる結論部の論述では、「○○が明らかに

なった」「確かに〇〇と言える」と言い切ってしまうことに問題があったのではないだろうか。したがって、本研究で明らかにした課題の一つひとつに丁寧に向き合うこと、質的研究が抱えている本質的な問題を自覚的に捉え検討し続けることは、音楽教育実践学としての授業研究の基盤をなす基礎理論的研究として極めて重要である。以上を提示することができた点に、本研究の音楽教育実践学としての学術的貢献がある。

専門の実践家である授業実践者は、より良い授業実践の創造のために努力し、授業実践の諸記録から確かな分析資料を作成し、それらの資料に基づいて詳細に省察的に分析し、分析結果をできるだけ端折らずに記述し、理解性があると考えられる結論を解釈可能性のある1つの洞察として論述しようとする。こうして生み出される1つの分析事例が他の実践者や授業研究者と共有され、議論や共感や実践の広がりを生み、授業実践の営みが新たに意味付けられていく。その研究過程で、得られた知見は再構成され「知見の蓋然性」(柴田 2007)が高まっていく。これが音楽教育実践学としての授業研究の方向性であるが、このような授業研究の基礎となる研究の1つに、研究デザインの具体としての質的研究の方法論的側面の検討が極めて重要な意味をもってくると考えている。

本研究は、検討の対象をかなり限定したと言う限界もある。そこで、今後の研究課題として、以下の2点をあげる。1つ目は、今回の研究では検討の対象から外したタイプAの研究(特定の理論に依拠した授業の実践過程の研究)を検討し、そこに質的研究の方法論的側面に関するどのような課題があるのか明らかにすることである。2つ目は、音楽教育実践学としての授業研究における研究デザインの枠組みを仮説的に打ち出すことである。

注

- 1) 本研究における授業研究とは、「より良い授業の創造を目指して授業の計画・実践・評価について研究すること」(横山 2017a, p.223)である。
- 2) 筆者自身も理論と実践の往還を本質とした音楽教育実践学の立場に首肯し研究を続けている。
- 3) 日本学校音楽教育実践学会が毎年度に発行している『学校音楽教育研究』および『学校音楽教育実践論集』を指す。2016年度までは『学校音楽教育研究』のみが発刊され、原著論文や学会全国大会自由研究発表要旨他が掲載されてきた。2017年度から新たな編集方針のもとで、主に原著論文を掲載する『学校音楽教育研究』と、主に学会全国大会自由研究発表要旨を掲載する『学校音楽教育実践論集』が同時に発刊されるようになっている。

引用・参考文献

- 池野範男, 2014. 第2節 教育研究の方法論的反省, 第3節 教育方法論の類型. In: 日本教育方法学会編, 教育方法学研究ハンドブック. 学文社. 51-54
- 大谷尚, 2000. 授業記録 Document of Instruction. In: 日本教育工学会編, 教育工学事典. 実教出版.

271-272

- 尾崎裕司, 2014. 「表情カード」を利用した内部世界の表出支援—発達障害のある児童生徒への音楽学習過程—。In: 日本学校音楽教育実践学会編. 学校音楽教育研究第18巻. 37-48
- JW・クレスウェル著/操華子・盛岡崇訳, 2011. 研究デザイン—質的・量的・そしてミックス法—. 日本看護出版協会
- 桑原章寧, 2017. 音楽教育実践学の構造. In: 日本音楽教育実践学会編, 音楽教育実践学事典. 音楽之友社. 12
- 柴田好章, 2007. 教育学研究における知的生産としての授業分析の可能性. In: 教育学研究第74巻第2号. 51-64
- 高木廣文, 2011. 第5章 質的研究の結果は、一般化できるのか. In: 質的研究を科学する. 医学書院. 89-99
- 董芳勝, 2017. 音楽教育実践学の対象. In: 桑原. 前掲書. 12
- 西園芳信, 2005. 第1章 音楽教育実践学の研究方法. In: 小学校音楽科カリキュラム構成に関する教育実践学的研究—「芸術の知」の能力の育成を目的として—. 風間書房. 17
- 西園芳信, 2017. 音楽教育実践学. In: 同上書, 10
- 日本学校音楽教育実践学会編. 学校音楽教育研究第5巻(2001) - 第27巻(2023)
- 無藤隆, 2005. 質的研究の三つのジレンマ—『再記述法』の提案による質的心理学の可能性—. In: 質的心理学研究第4号. 58-64
- 横山真理, 2013. 「協働」の観点からみた構成的音楽表現活動における個の表現の様相—中学校特別支援学級での箏を使った創作授業の分析—. In: 日本学校音楽教育実践学会編. 学校音楽教育研究第17巻. 65-76
- 横山真理, 2016. 「構成活動」を原理とした音楽科授業における遊びから学習への連続性—中学校特別支援学級での事例の分析を通して—. In: 日本学校音楽教育実践学会編. 学校音楽教育研究第20巻. 3-14
- 横山真理, 2017a. 授業研究. In: 桑原. 前掲書. 223
- 横山真理, 2017b. 社会的相互作用の観点からみた音楽科授業におけるJSL生徒の学習語彙の習得過程. In: 日本学校音楽教育実践学会編. 学校音楽教育研究第21巻. 61-72
- 横山真理・鈴木健司, 2020. 歌唱表現イメージの伝え合いを成立させる学習環境要因としての共用の楽譜の機能—《箱根八里》を教材とした歌唱授業の分析—. In: 日本学校音楽教育実践学会編. 学校音楽教育研究第24巻. 1-12
- 横山真理, 2023. 「構成活動」を原理とした音楽科授業におけるイメージの発生メカニズム. みずほ出版

付記

1. 本研究は、JSPS 科研費基盤研究 (C) 21K02560 の助成を受けて実施している。
2. 本論文は、日本学校音楽教育実践学会第28回全国大会自由研究口頭発表に基づいて執筆した。